

令和3年度第2回世界農業遺産等専門家会議
静岡県掛川周辺地域における更なる保全・活用に向けた助言

- 1 世界的にも土壌の持つ炭素固定能力を評価する動きがあり、次期アクションプランに「炭素貯留効果の見える化」を導入する点は評価できる。一方で、農業を営むことが窒素やリンの土壌過度を進め、環境を悪化させているとも言われている。今後の世界的な課題として、いかに環境に悪い農業を減らし、環境に良い農業を増やすかを考えることが重要とされていることも鑑み、炭素固定能力だけに観点をしぼるのではなく、窒素やリン、農薬等の使用軽減など、多面的な茶草場農法が持続可能な社会形成の貢献に繋がるとして、さらなる議論を展開されたい。
- 2 認証制度については、ススキ草原の存在有無で認定をするのではなく、実際に茶草場農法を実践している生産者が報われる仕組みが必要である。今後、茶草場農法の価値を広めるためにも、生産者や消費者、茶商、若い世代や市民への認識を深め、認定について量から質への転換を図ることが重要。茶草場農法を長年研究している専門家等の知恵も借りながら、多面的かつ学術的な議論もより深めて頂きたい。
- 3 茶草を刈る仕事は今の農業の形だと生産者に任せる形になっているが、生産者に任せることに無理が生じる場合は、阿蘇などの例も参考に市民ボランティアを巻き込んで市の健康福祉課と協力して健康増進に繋げるなど、行政と一緒に全体的な健康ツーリズムなどに地元の理解を得て巻き込んでいくことが茶葉の再評価にも繋がるのではないかと。
- 4 みどりの食料システム戦略では、これから、有機農業の取組面積を増やすことが目標とされている。茶草場農法の採草地（茶草場）は、化学肥料や農薬に頼らない管理をしやすいため、管理方法によっては茶草場の面積を有機農業の取組面積として増やすことができる可能性がある。自治体と一緒に、茶草場の価値について考えていくことも一案。
- 5 茶草場は、棚田との関連や過去に馬草場であった特性など、多様な特徴があることが明らかになった。地区ごとの相違点と共通点の明確化や、その情報のマッピングにより、地域内のネットワークを形成し、棚田と茶草場が近接している傾斜地農業の中でも特異なランドスケープを活かし、マイクロツーリズムに繋げていただきたい。掛川市民や静岡県民など地元茶草場農法を伝え、自分たちが地域の価値をしっかりと理解してシビックプライドに繋げることで、外に向けた発信が徐々に広がることを意識されたい。